

# トハトトコシク

高田 友

讚美歌に左のごときあり。

父御子聖靈の大御神にときはに絶えせず御榮えあれ

「ときは」は「とこしへ」の義なり。その語源は「とこいは（常磐）」と推測せらる。「岩のごとく永遠に變るなき」を言ひたるならん。「常葉」の字を宛つること多かれど、怕るらくは語源俗解なるべし。

この歌、五七五七七になりそこねたる本朝の歌のごとくに覺ゆれど、原曲の歌詞は英語なり。

Glory be to the Father, and to the Son, and to the Holy Spirit: As it was in the morning, is now, and ever shall be, world without end. Amen.

末尾 world の後ろに be の省略せられて、「世界、終ることなかるべし」なる祈願文たるは、天壤無窮の神敕「天津日嗣の榮えまさんこと、まさに天地と窮りなかるべし」を髣髴とせしむ。洋の東西を問はず、神明を讚ふるの情、豈異なるなしと言はざるべけんや。

明治初年の譯詞は「ときはに絶えせず」を「ときはもかきはも（みさかえあれ）」と歌ひてあり。「かきは」は語源すなはち「堅磐」にて、「かたき磐」を縮約したるなり。kataki-*ia* の *ta* を脱落せしめたるに相違なし。「かきは」を「かちは」と訛りたるもあるは、*aki* の脱落したるなるべし。

すべらぎをときはかきはに守る山の

山人ならし山鬢せり（新古今）

「永遠・永久・久遠」を「とは・とこしへ」と訓む。

「とは」とは何ぞや。「とこいは」の「とこは」と縮まり、さらに「とは」となりたるならん。若しは「ときは」の「き」の脱落したりといふも可ならん。

「とこしへ」の語源は如何。

「常」を「とこ」と讀むあり。「とこよ（常世）」といへば、「常なる世」の謂ひにして、元來は現世の意なれど、轉じて「黄泉國」を指すに至る。所説あれど、あるいは「うつしよ」に拮抗せしめんがために「とこよ」と言ひて、むしろ「黄泉國」を指すがそもその始めならんや。

「とこしへ」の「とこし」は「常」の形容詞に活用したるなり。萬葉にては「とこしく」は「しきりに・もはらに」の意なり。而して、「へ」は「方向・ほとり」の義にして、「邊」を宛つるは宛字なれど、「大君のへにこそ死なめ」、「いづへの方に我が戀やまむ」もその例なり。然則「とこしへ」は「もはらに」方向へ專念す、これ原意ならん。轉じて、「常なる世に」重に變ることなき「とて」、「永遠に」の義に轉じたりけん。

「とこしなへ」といふもあり。「な」は「の」の變形ならんとは我が臆測なり。

「久遠」は「きうゑん」ならで、「くをん」と読む。「久」も「九」も《漢音》は「きう」、《吳音》は「く」、「遠」は《漢音》「ゑん」、《吳音》「をん」なり。しかうして、「久遠」は佛教用語なれば、《吳音》にて讀むが通例。すなはち「くをん」となる。

「九重」は「宮中」を指すには《漢音》にて「きうちよう」なり。「このへ」とは、「七重八重」に準じて、牽強付會して訓じたる所、漢字傳來以前の和語にて皇宮を「このへ」と言ひたるにはあらず。しかうして、「九重の塔」にては、佛教用語なるがゆゑに「くぢゅうのたふ」と《吳音》を用ゐる。「きうちゅうのたふ」は誤りなり。「重」の字は、漢音「ちよう」、吳音「ぢゅう」

閑話休題、「南望鶴城砲煙颺」の詩吟を以て名高き「白虎隊」の歌の第四聯を見ん。戦後の崩れたる歌詞は左の如し。

飯盛山の頂きに 秋吹く風は寒けれど

忠烈今も香に残す 花も會津の白虎隊

原文難解なりとて、なんたる淺ましき改編をか爲す。

「秋風」を「秋吹く風」とは笑止千萬。本朝文化の破壊を企てたる逆臣の愚かなる畫策なり。今、秋なるは既に明白なるに、「吹く風」に「秋」を加ふるとは、詩心持たぬ俗人の所業、天罰下つて腸捻轉に斃れよかし。

明治の原典にては、「松籟」なり。「籟」は「ふえ（笛）」。「松枝の間を風の吹き抜くる際に笛の如き音を立つるを以て斯くは申すなり。

「今も香に残す」は明治の原典にては「永遠に香を残す」。「十有九士死したりと雖も、忠烈の譽、すなはち芳しき馨と化して後の世に傳はらん」の謂ひなれば、「香を焚きて、その馨に乗りて名聲の傳はる」の義にはあらざるなり。名聲の芳香と化するは科學的ならずとて愚人の手を加へたるに相違なし。下品の後人、やはか先達の名作を推敲して、駿馬を驚馬に墮せしむべしや。

明治の原典を紹介せん。

飯盛山の秋深く 松籟肌に寒けれど

忠烈永遠に香を残す 花も會津の白虎隊

ここにもまた「永遠」を「とは」と訓ずるあり。割腹より已に百五十年、今なほその誠心の世に喧傳せらるるは、洵に「忠烈永遠に香を残す」の言ひ條にふさはしきかな。

今一つ「永遠」の見らるる歌、舊制高等學校「七高寮歌」（鹿兒島）を眺めん。

北辰斜に差す所 大瀛の海洋々乎

春花薰る神州の 正氣は籠る白鶴城

芳英永遠に盡きせねば 歴史も舊りぬ四百年

「辰」に「星」の意あり、「北辰」は「北極星」なり。北極星、頭上に光るにあらで、天

の低き北方より斜めに差す。すなはち、南國の地薩摩にあるを言へり。

清和天皇皇子に「貞辰親王」あり。基經外甥。基經外甥。「さだとき」と訓ず。「辰」を「とき」と讀むは「ほし」の「とき」に通ずればなり。「歳在癸丑」を「ほしはきちうにあり」と讀むもその類。そもそも由來を尋ぬれば、「歳」は「歳星」すなはち木星にして、十二年にて天を旋るがゆゑに十二支になぞらへらる。「ほし」は「とき」をぞ刻むなる。

「瀛」は「海」なり。「洋々乎」は「洋々と」と言ひて障りなし。「乎」は「副詞を作る語尾」にて、「斷乎」「凜乎」の「乎」。「斷乎」を「断固」と書くは戦後文部省の捏造したる嘘字たるを知らずやあるべき。歌詞は「大海原の水のたゆたふ」様を言へるなり。

「白鶴城」は鹿兒島城の異名。會津若松城また「鶴ヶ城」なれど、城の總構へは空より見れば鶴の羽を擴げたるに似るによりて、世に「鶴ヶ城」「白鶴城」と呼ばれる城少なからず。岩槻城然り、大分府内城また然り。

而して、「芳英永遠に盡きせねば」は「永遠に香を残す」と同斷。美しき城と薩摩武士の忠烈花の如き甘き馨を傳へ來たるを讃ふ。「四百年」とは、戦國の世に鹿兒島城の造營せられたるより第七高等學校造士館創立まで數へて四百年を経たるをいふ。「芳英」の「芳」は「かをりよし」、「英」は「はなぶさ」にて、「かをりよき花」と歌ひたるなり。ここにまた「永遠」を「とは」と讀みてあり。

「舊(旧)」「古」「經」、いづれも動詞「ふ」に宛つ。「古くなる」を文語にては「ふ／下二段」といふ。城はすでに四百年を閱したりと言へるなり。なほ、「閱」を「けみす」と讀むは、「檢」の字音「けむ」(隋唐音 kam) を字義の似たる「閱」に轉用したるなり。

本稿の題名「トハトトコシへ」は「永遠と永久」の義なり。

(令和元年七月二十三日受附)